

農業と食べもの

お米の歴史学

『稲作小言』

国士舘大学21世紀アジア学部教授 ● 原田信男

明治三老農・船津伝次平の教
え子の一人で、その隣家に住ん
でいた奈良重平は、農業技術の
学習に専念し、伝次平の忠実な
弟子となりました。やがて重平
は、そうした知識と技術を、多
くの人々に広めるため、伝次平
に手を入れてもらって『稲作小
言』なる冊子を刊行します。

日本の庶民文化には、暗記す
べきことを歌に置き換え、これ
を覚えやすくするという工夫が
ありましたが、この『稲作小言』
も、実践的な農業技術を、流行
のちよぼくれ節に託した一般の
農民向けの指導テキストでした。
まず最初に「ヤレヤレ皆様、
しばらく御耳を拝借しますよ。
私と申すは、ずーつと昔の、其
又むかしの、神世の時代に、豊
葦原より、あらはれ出まして、
夫れより日本に、広まりました
る、御米であります。此たびか
しこぎ、皇国の為にと、種えり
たねまき、こやしにさしなへ、

草取水掛、害虫予防に、収穫調
整、貯蔵につきかた、飯炊法ま
で、実地を主として、あらし
述べます」と口上を述べ、続け
て稲作の利点を列挙しています。
特に明治初年に移入された肉食
への対抗意識が強く表れた部分
もありますが、基本的には実際
的な選種の方法や苗代について
の注意に大半が割かれています。
しかも、そこには具体的な数値
が示されるなど、農書を読むこ
とができない
ような農民に
も、分かりや
すいように最
新の農業技術
を伝えること
を目的として
いました。
日本各地の
農民たちが、
非常に長い年
月をかけて、
経験的に自ら

のものとしてきた稲作の知識と
技術は、単に農書として残され
るだけではなく、こうした親し
みやすい方法によって、広く仲
間たちの間に広がっていくことと考
えていました。まさに稲作の豊
穡は、家の繁栄であり村の繁
栄でもあり、それが国家社会の
発展につながると思われていまし
た。そうした農民たちの努力が、
近代日本の繁栄を根底から支え
ていたのです。



節分と快適な衣服

一般財団法人日本気象協会 ● 檜山靖洋

2月3日は節分です。「鬼は外！福は
内！」と豆まきをすれば、もう春はそこ
まで来ています。その翌日は立春です。
立春を境に気温が上昇に転じる地域が多
いですが、立春が寒さの底ですから、し
ばらくはまだ寒い日が多いです。春は名
のみと『早春賦』で歌われる通りです。
寒い季節は、服を3枚、4枚と重ね着
をしてしのぎますが、上に着る服やコー
トの暖かさは寒さをしのぐ重要な要素で
すね。でも、衣服と皮膚との間の温度や
湿度、皮膚が触れる感触などが、快適か
どうかを決める大きな要素になるといい
ます。例えば、夏の場合、暑ければ何も
着なければいいかというと、そうでもな
く、日差しが強烈な場合は、風通しの良
い長袖の方が暑さをしのげます。

最近はずのいい保温素材の下着も増え
て、寒い冬も快適に過ごせるようになって
きました。「服は内」側が大切という
ことになりましたね。

